



建築とのコラボレーションで、 日本のインテリアファブリックスの 可能性を高めたい

I Want to Increase the Potential of Japanese Interior Fabrics Through
Collaboration with Architecture

NUNOが設立されて26年。ディレクターの須藤玲子さんを筆頭に、メンバー12人全員がデザイナーとして、布地の開発とその製品の企画、製造、販売を一貫して行っている。ショップには服やストールなどが並んでいるが、ファッションの枠組みではなく、あくまでも「布地屋」。新作の企画も用途から入るのではなく、「こういうのがあったら面白い」からスタートする。布地を見てイメージをふくらませ、服にする人がいてもいいし、カーテンにする人がいてもいい、という考えだ。その一方で、一つの建築のためのオリジナルファブリックス開発も手がけている。よく知られているのは建築家、伊東豊雄さんとのコラボレーション。「桜上水K邸」「せんだいメディアテーク」をはじめ、ここ10年ほどの伊東さんの

建築ではNUNOの布地が空間の一部として大きな役割を担っている。2007年に完成した「多摩美術大学図書館（八王子キャンパス）」もその一つである。土地の形状そのままになだらかに床が傾斜する建物は、構造体のアーチとガラスが一体となった伸びやかな大空間。アーチの向こうにアーチが重なって、建物の内にながら広場にいるような、内外が混ざり合う不思議な開放感に満ちている。「建築のための布のデザインは、建物の骨格がある程度できた段階で、実際にその空間を体験することから始まります」と語るのは、建築やインテリアの仕事を主に担当する安東陽子さん。「その時頭の中に浮かぶイメージは感覚的なもので言葉で説明するのは難しいのですが、今回の

場合、アーチが強いからモコモコした柔らかい感じがいいかな、わりとはっきりとした形でいいな、と。伊東さんからは“素材感があるもの”で色は“白”とリクエストがありました。ウロコ状のパターンにしたのは、アーチとリンクさせようとしたからでもあります。くっきりした輪郭をとることで遠くからでもウロコの形が認識でき、建築に負けないちょうどいいサイズになると思いました。レースのように見えて、窓際(の机)に近寄るとタオルのような柔らかさがあることがわかる。遠くで見た時、近くで見た時にどう感じるか、というのも重要です。人が自由に動く時の空間と布との関係を考えました」布があることで生き生きとした空間になるように、歩き回りたくなるような空間になるように。

NUNO テキスタイルコーディネーター・デザイナー
Textile Coordinator & Designer, NUNO

安東陽子 ANDO, YOKO